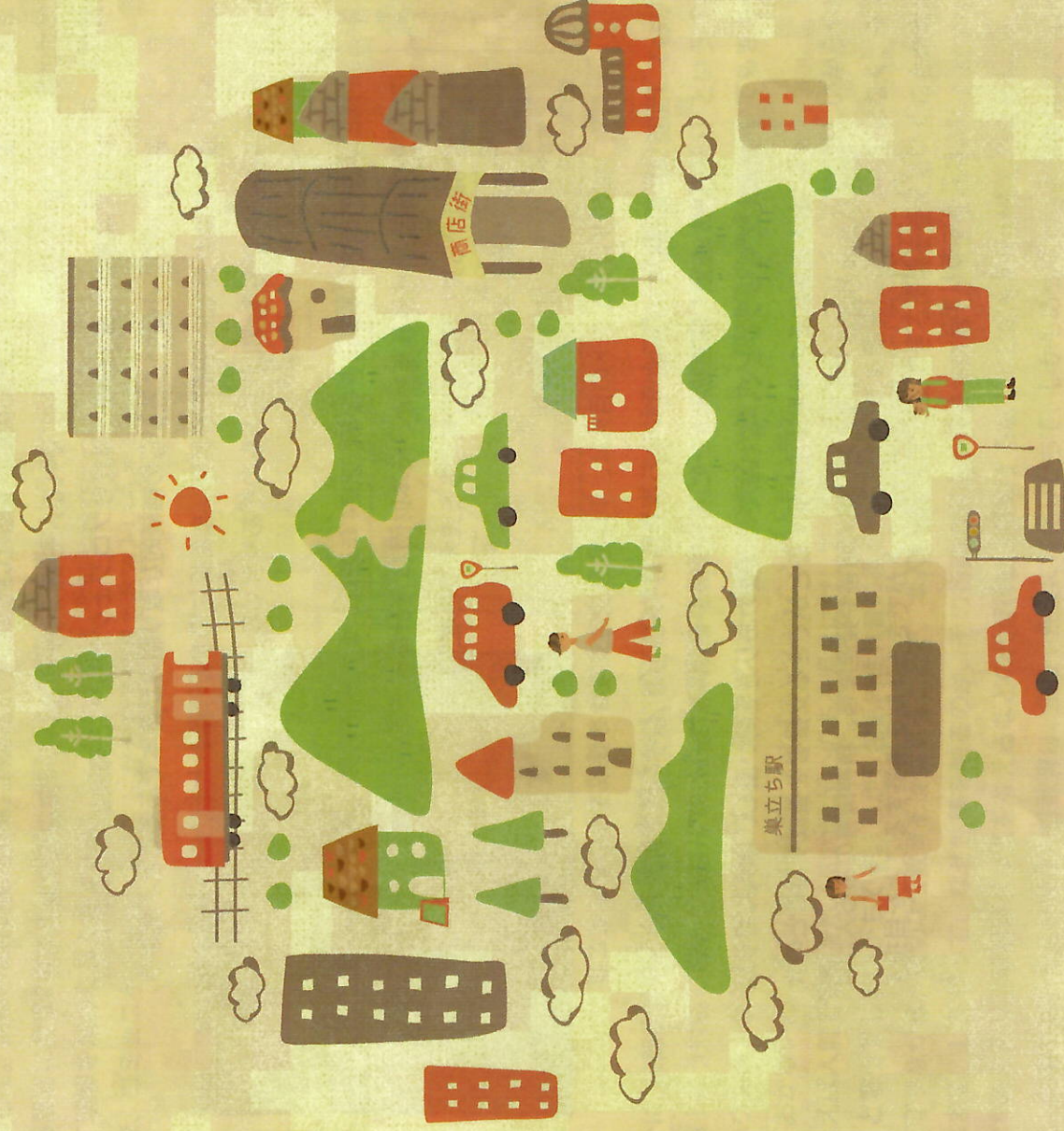


障害者の巣立ちを促す地域生活支援

巣立ちプロジェクトⅢ

2024 報告書



はじめに

このプロジェクトは、親亡き後、知的障害や発達障害、精神障害のある子が安心して生活が送れるようなシステムを構築するにはどうしたらよいかという親たちの勉強会からがスタートでした。

しかし、回を重ねるごとに親たちの希望を実現するということではなく、これらの人生を誰とどこで暮らし、どんな生活を送っていくかを決めるのは他でもない障害のある本人であって、本人自身が自らの人生を決めていくように支援する（あるいは、やむを得ず本人に代わって決めていく）体制を作っていくことが大切であるという気づきが生まれ、本人に寄り添い本人の意思決定を支援してくれる人を養成しようという「障害者の巣立ちを促す地域生活支援（通称 巣立ちプロジェクト）」へと発展していきました。実践の中で、小さいころからの継続的な取り組みが基本であること、児から者への切れ目ない支援の必要性、また性に関する課題も大きいことなど、私たちの学びも多岐にわたるものでありました。

その中で、3年目となる、2024年度は、北九州市の委託事業「障害者意思決定支援推進事業」と、日本財団（3年計画を予定）の助成事業「生と性の視点から見た障害者の巣立ちを支える地域生活支援」とを並行して実践してまいりました。

このプロジェクトの目的は、単に意思決定支援者を養成することにとどまらず、「私たちのことを私たち抜きに決めないで」という障害のある人の当然の思いを親や障害福祉サービスを提供する関係者はもとより、広く一般に理解してもらうことで、これまでの支援のあり方を問い直し、本人に寄り添い、本人自身にその意思決定を促すことができる支援者を養成することの大切さが共通の認識となること、知的障害や発達障害、精神障害のある人が本人のニーズに応じた支援をうけることができる体制を構築することを目指すところにあります。

2024年度の事業全体としては、

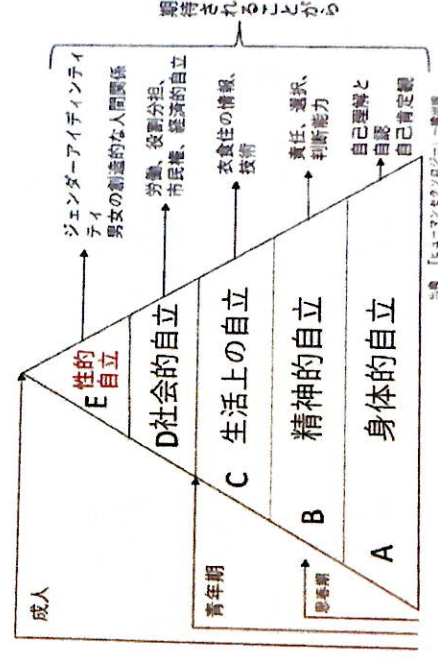
- ① 「性的課題に係る」実状の把握と課題整理、先進地視察とその情報の共有
 - ② 障害のある方々の意思決定や意思決定支援に関する周知を図るための啓発活動、啓発講演の開催
 - ③ 意思決定支援者養成講座
 - ④ 支援者ネットワークの構築～弁護士や精神保健福祉士、受講生による支援者ネットワークの構築、モデルづくり
 - ⑤ 障害のある人たちの意思決定支援を支える環境の整備に関すること
- ☆よろず相談所の開設(NPO法人 nestとして継続)～親亡き後に関する相談援助
- ※①は、日本財団助成事業、②～⑤が市の委託事業です。

1. 「性的課題に係る」実状の把握と課題整理、先進地視察とその情報の共有

-1, 「性的課題に係る」実状の把握と課題整理

【ゼロから学ぶ 障がいのある子ども・若者の生と性 研修会】

2024年10月18日(金)・19日(土)に、「ゼロから学ぶ 障がいのある子ども・若者の生と性」と題し、市内の放課後等デイサービスの職員および保護者を対象とした研修会を行いました。2日間で延べ81名の方々が参加されました。講師の中村まり子さん(長崎県“人間と性”教育研究協議会代表：助産師)のお話は、これまでの経験談も豊富に含まれており、若者が抱える性の悩みや課題がリアルに伝わってきました。また「包括的性教育」について理解を深めることができました。性の問題は、生殖や性交についてだけでなく、人権や生き方、人間関係(性的同意、コミュニケーションなど)にかかわる問題であるということです。



確かに、放課後等デイサービスにおいては、まさに今、目の前で、利用児の性にまつわる課題に直面しており、困っている！どう対応しよう！と悩んでいるところも多々あります。「こんな時こう対応したらいい」という「とりあえずハウツー」が欲しいところですが、そのハウツーの基盤にある人権や人間関係の考え方についてもきちんと理解しておかないと、不適切な対応をしかねないということです。

たとえば人前で性器を触る知的障がいのある児童に対して、「汚いからやめなさい！」「恥ずかしいからやめなさい！」と言ってしまいがちです。しかし包括的性教育の視点からは性行動を闇雲に否定するのではなく、子どもの尊厳を守りながら、適切な性教育を提供することで、本人が安心して行動できる環境を整えていくことが適当と考えられます。したがって、なぜ性器を触るのか、その行動の理由や背景を理解し、「プライベートとパブリック」の概念を教えたり、手遊びグッズを与えるなどの代替行動を提案するなどの対応も有効かもしれません。

また、日本におけるこれまでの性教育は、生殖や性交に特化しがちで、しかもあってないようなものでしたので、多くの人は友達同士の会話から、メディアから、なんとなく、いつの間にか、知らないうちに、性にかかわるエトセトラを学んで(?)きました。したがって、ほとんどの人は自分の知っていることが本当に正しいのか自信があ

りません。そうすると、知的障がいや発達障がいのある児童から、性について尋ねられても、気恥ずかしいこともあり、ごまかしてしまいがちです。しかし、中村先生のお話をうかがって、性についての正しい知識を得ることと、児童に性の話をするうえでの気恥ずかしさを乗り越える必要性を実感しました。

参加者の大半が、放課後等デイサービスの事業所職員ですが、保護者、相談支援専門員、学生、障害福祉サービスの事業所職員方など数名ずつおられました。

以下、それぞれの立場ごとに、参加者の方々からの感想をご紹介します。

【事業所】

- ・「こういう時どうしよう、どんな声かけしよう」と困った時に考える大切さを再認識でききっかけとなった。
- ・なぜか性は恥ずかしいことのような、秘密にするような考え方が多く疑問に思っていた。児童にも保護者にも寄り添いながら伝えていきたい。
- ・児童への対応の方法について学んでいかなければいけないと強く思った。性被害にあわないために何ができるか考えていきたい。
- ・とても分かりやすい話だった。もう少し早く聞きたかった。
- ・勉強になった。

【保護者】

- ・子どもとの接し方について振り返るよい機会になった。今日は夫と参加。一つ一つが考えさせられる内容だったからこそ、資料の後半部分について、もっと話を聞いてみたかった。自分だけが話を聞いて、成程と思ってても夫や子どもにも上手に説明できないのが悩み。
- ・男児なので夫から話をしてほしい。

【その他一般】

- ・年齢に合った性についての関り・説明が大切だとわかったが、実際にどう関わるのか、声をかけるのがいいのかわかりづらかった。現場での声かけ・関わり方が知りたかった。
- ・人との距離感がよくわからず、悪気なく接している利用者さんと関わっているとき、伝え方が難しい。
- ・講演、本当にすばらしかった。日々の支援に活かしていきたいことがたくさんあった。もっと長い時間を聞く時間があった。また聞きたい。
- ・もっとしっかりと学びたいと思った。

【訪問研修会】

10月に開催した「障がいのある子ども・若者の性と性」の参加者の中から、ご希望のあった放課後等デイサービス事業所を対象に、個別の訪問研修会を開催しました。2024年11月～2025年3月までに8カ所の施設・事業所を訪問させていただきましたが、近隣の事業所や相談支援専門員、保護者の方々にもお声掛けして下さったこともあり、計79名の方にご参加いただきました。(内、1カ所は昨年度から個別に研修を組み立てている事業所で

設立者プロジェクト員
～性と性の視点から見た障害者の自立を支える地域生活支援～

放課後等デイサービス事業所
おはろけのりな対象
研修会

ゼロから学ぶ
障害のある子ども・若者の
性と性

場所／北九州市立大学 フランキー・ウー アジア国際交流ホール
〒810-0192 唐土区唐土 1-1-1 (唐土駅より徒歩10分)

日程／11月18日(金)10:00～12:00 開場 9:30
210月19日(土)10:00～12:00 開場 9:30
お申し込みは各自の定額300円
参加費無料
QQととも集約・場所が異なります。ご参加ください。

お申し込み用QRコード
10月4日締め切り

★お申し込みあり
(申し込み時に書写券)
お申し込み費 ¥1,000

お問い合わせ先
電話 080-3905-7019 / Email: mizuho.0905@outlook.jp (佐藤)

3

あるため、その数は集計にはいれておりません)

この訪問研修の目的の一つは、支援者や保護者が性について正しく知ることです。また、個別プログラムへの参加を求めている家庭を見つけることもねらいにあります。研修講師を務める松本麻子さん（北九州市障害者基幹相談支援センター：助産師・保健師・看護師）とプロジェクトチームメンバーが事前に対象事業所を訪問し、それぞれの事業所が置かれている現状をお伺いしてから研修に臨みました。

講義は、放課後等デイサービスの現場で起きている性的な問題、講師である松本さんがこれまでの支援で遭遇した事例（事業所の対応や親御さんの様子も含む）、個別・集団プログラムの具体的内容、性教育の現場でよくある質問とその回答等、かなり具体的に詳細な内容でした。



研修終了後に参加者の方々に寄せられたアンケートからは、参加者の方々が研修を通して多くの学びを得られたことが伝わってきました。結果の一部を以下でご紹介します。

【お子様や利用者、性に関することについて伝えていく上での、自身の率直なお気持ちや認識について】

伝えていかないかと思いつつながら濁している部分がある。伝えにくい、そのうち・・・という気持ちがあった。子どもがもう中3になったので、性に関することに対して、親から聞きたくない様子で、性をきいていないのか気になっているが、答えてもらえなくてモヤモヤする。

理解できる伝え方がわからない。

正しい知識かどうか、きちんと伝わるかどうか不安。

話す側にも聞く側にも言いにくさはある。また曖昧な表現が苦手な特徴もあるため、伝える方法にも難しさを感じる。

性に関することを伝える事は苦手だが、話しやすい関係性を築き、話してくれたり、相談があれば可能な範囲で説明し、専門に繋がりたいと思っている。

正直恥ずかしい部分はある。またハラスメントが問題になる世の中なので、異性に対して性に関する話はづらい。

正直たくない。嫌。異性のため、うまく伝えてやれないし、私自身が恥ずかしい気持ちがある。性に対する嫌悪感があるし、大人になっていくには必要なことだけど、子どものままでもいい気持ちもある。人の男性として紳士的な男性になってほしい気持ちもある。

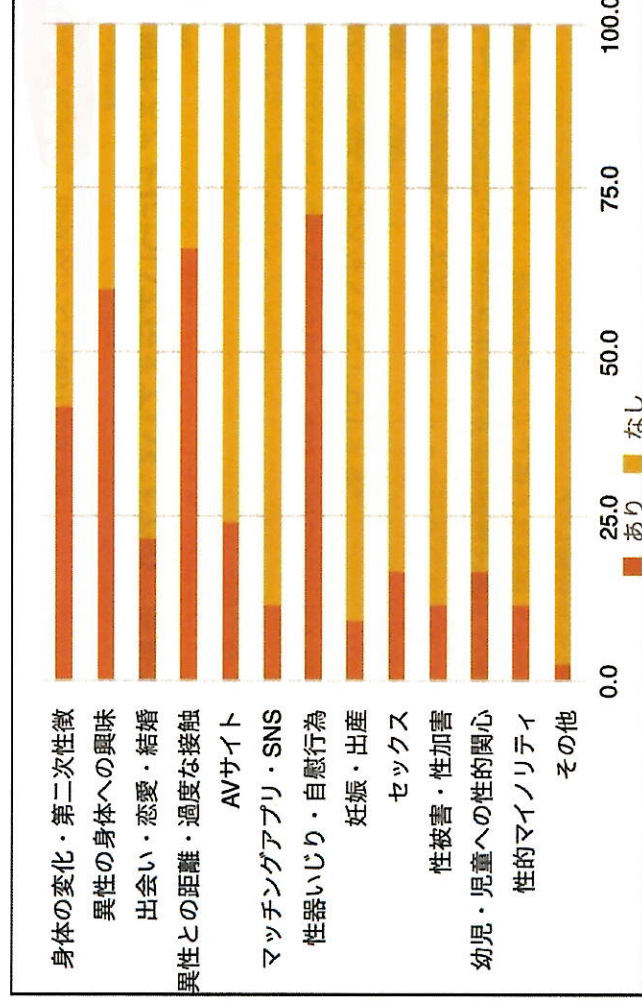
重度知的障害の息子が本能のまま行動していく中で、性を伝えることができるのか不安がある。

恥ずかしいことという認識が強く、ごまかしてしまいたくなる。

難しいと感じている。間違った捉え方をされると、責任を感じる。

【研修に参加して、感じたことや気づいたこと、あらたに学んだこと】

- ・説明が大切だと思った。ただ「ダメ」「してはいけない」と言うだけだったり、言っではいけないことを学んだ。これまではこちらが言っていることが伝わってないために、行為を繰り返していたのだと思う。
- ・たくさんのことが知れてよかった。とても勉強になった。成長していく中で伝えなければならぬと思いつながら、言葉を濁している部分もあったので、しっかりと伝えていくことが必要と感じた。
- ・保護者に対しての対応もとても大切なことであることを知った。
- ・しっかり学んでいない世代なので、若干の拒否反応を感じてしまっていました。正しく私たちが学んでいくことで、正しく知り、伝えていくことが必要であるのを感じました。
- ・女性のことに関しては、理解できていても、男性の体のことについては知っているつもりのことや、全く知らないこともあり、ためになると同時に、もっと学ぶ必要を感じた。
- ・大人が恥ずかしがって話をしないことによって、子供たちにとって悪い方向に進んでいってしまうことがあるので、大人がきちんと正しいことを話していくことが大切であると思った。
- ・自分の時はこんなに詳しく教わるのがなかったので、もう少し早くにお聞きすることができていると、子供・保護者等にも保育の現場などでも対応ができたのではないかと思う。
- ・10歳、11歳で妊娠をしている子供たちがいることにびっくりした。このような状態にならないように、保護者や児童たちにも正しい知識を学んでほしい。
- ・具体的に話してくださる研修は、これまでなかった。とても勉強になった。
- ・自分の知識のなさを知ることでも、児童にどのように向き合うべきかを学べた。



研修の終わりには、質疑応答の時間もとらせていただきましたが、その後、3例については専門相談として継続的に対応させていただいております。

自分たち自身が「教えられてこなかった」から「教え方がわからない、自信がない」、ましてや障害があると余計に不安がある、・・・その連鎖は続きます。改めて、私たち自身も、包括的性教育の実施の重要性を再確認したところ。来年度、「者」の事業所に移行して、調査を進めてまいります。

性=生きること。幼いころからの継続した学びの中から、自分を大切に、他者も愛する人も大切に、自分だけでなく相手の人生も大切に、・・・そんな成長を応援していきたいものです。

国際セクシュアリティ教育ガイダンス



出典：日本産婦人科医会「思春期ってなんだろう?性ってなんだろう? (2024年改訂版)」

15

ー包括的性教育の大前提ー

- 科学的に正確である
- 徐々に進展する
- 年齢、成長に即している
- カリキュラムベースである
- 包括的である
- 人権的アプローチに基づいている
- ジェンダー平等を基盤にしている
- その国・地域の文化と関連させる
- 変化をもたらす
- 健康的な選択のためのライフスキルを発達させる



レベル1 5-8歳
レベル2 9-12歳
レベル3 12-15歳
レベル4 15-18歳以上

● 否定しない

誤ごなしに「ため」「そんなことまだ知らなくていい」等と否定をせずに、まずは「そんな風に考えたんだね」と受け止めることから始めよう。

● 科学的に

科学的に、正確な情報を、子どもが理解できる優しいことばで 伝えるようにしよう。

● 子どもがどう考えるかを大切に

性について多様な考えや価値観があり、自分の考えや他人の価値観を大切にすることが相互理解・尊重につながります。

● 生活の中での積みかさねが大切

性教育は「一度すれば終わり」ではなく、生活の中でさまざまなテーマで繰り返し行うもの。繰り返して学ぶ必要はなく、一緒に考える姿勢が重要です。

出典：PILCON 家庭で子どもに性教育をするときのポイント

17



-2.先進地視察とその情報の共有

今年は、天候で中止せざるをえなかったり、先方との調整等もなかなかうまくいかなかったことも重なり、「佛子園一か所だけになりました。share 金沢、行善寺、三草二木西国寺、輪島 KABURET、4か所にお邪魔してきました。

佛子園の大切なキーワードは、“ごちゃまぜ”。つまり支援者と支援を受ける人が“ごちゃまぜ”であることshare 金沢の最大の特徴は、障がい者、高齢者、学生、地域住民など、様々な人々が“ごちゃまぜ”になって生活している点です。この“ごちゃまぜ”の状態は、従来の福祉施設のような閉鎖的な空間ではなく、開かれた地域コミュニティを形成し、相互理解と支え合いを促進します。

例えば、share 金沢には障がい児の入所施設があります。学生向け住宅もあり、ここでは学生が施設内でボランティア活動を行うことが義務付けられ、障がいのある子どもたちと一緒に食事をしたり、遊んだりすることで、自然な交流が生まれていきます。そして、時には、勉強を教える立場にもなります。また、サービス付き高齢者向け住宅の高齢者が障がいのある子どもたちの面倒を見ることで、生きがいを見つけたリ、地域住民が施設の運営に協力することで、地域全体で支え合う体制が構築されています。

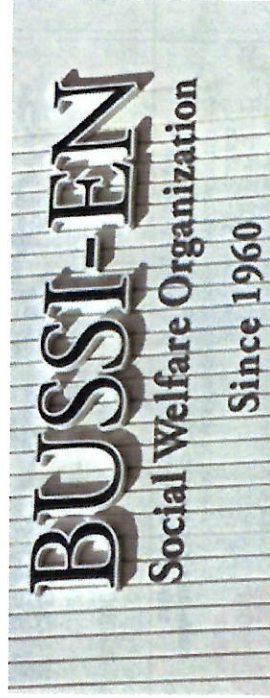
このように、支援者と支援を受ける人の垣根を取り払い、誰もが主体的に関わることで、地域全体の活性化に繋がっています。どこに行っても、施設を中心には温泉があり、「入浴中」を示すプレートが地域の世帯ごとの名札を兼ねることで、緩やかな安否確認のひとつのツールにもなっています。“ごちゃまぜ”を生み出す仕掛けとして、福祉施設を兼ねる温泉施設をつくるという発想の面白さと、そのために「温泉のあるところに施設をつくるのではなく、地域に温泉がでるまで掘る！」というエネルギーに敬服します。また、温泉施設にはスポーツジムもあり、障がいのある方が受付や清掃等を担う就労の場となっています。ここは地域住民が利用する一般的なスポーツジムであり、障がいの者の介護予防やリハビリ、障がいの者の機能訓練、職員の福利厚生施設等、多様な機能を有しています。誰もが生涯現役であるために健康を意識し、維持する…、30キロ、40キロのダンベルが無造作にあるところに本気を感じました。温泉に併設されている食事処としての蕎麦屋では、麵づくりを就労継続支援A型で担い、機械で製麺された蕎麦を、店内でA型・B型のメンバーが接客し、お客さんに提供しています。館内には、生活介護や介護保険サービスの事業所、放課後等デイサービス等もあり、売店には子どもたち用の駄菓子が多数おかれていますし、季節の野菜や花が売られています。人の流れだけでなく、いろんなものが、館内から地域へ、また地域から館内へ循環する仕組みがつくられています。

share 金沢の取り組みは、これからの地域福祉のあり方を示すものとして、大いに注目されるでしょう。主体性を地域の方々に100%委ねることで、地域との繋がりが深まります。こうした支援をする側・される側という関係性を超えた“ごちゃまぜ”の場所では、一人ひとりに役割があることによって、主体性が生まれます。主体性をもって暮らせる場所には生きがい生まれ、愛着も湧く場所になるという好循環が生まれます。誰もが分け隔てなく、皆で同じ方向を向きながら暮らし、働き、集い、笑い、そんな“ごちゃまぜ”のパワーが地域を元気にしてくれるでしょう。今回、「性」の課題についてもお聞きしました。課題としては、「十分取り組みの必要性を痛感しているが、性的虐待を含む被虐待児が多くを占める障害児入所施設では、非常にナイーブにならざるを得ない問題であるため、タイミングを図っている」「二次障害に至るリスクもあり、なかなか難しいと感じている」と話されていました。

今回、プロジェクトチームでも、市内の課題等について聞く機会を設けていますが、その中でも、学校、家庭、放課後等デイサービス、相談支援専門員等関係機関の情報共有や連携は必須だと実感しました。知らない・教えられていない・語られないことから起こる混乱や、いわゆる「問題行動」とされてしまいがちな行動、ひいては性加害に至る可能性のあるものも浮上してきています。「性に関する教育」は、まさに「生きるための教育」であることを再認識させられましたし、研修の中でも「こんな話を初めて聞いた、もっと早く聞きたかった」の声の多さに驚かされています。

「性＝生きること」、これはみんなが共通に出会う大切なテーマです。性に関わる様々なリスクにも備え、対応できる体制をつくっていくことが喫緊の課題となっています。

私たちは、性に関わる課題に対し、「地域でできることはないのだろうか」、「地域の役割はなんだろう」、自問しています。まずは、包括的性教育の実践部隊をつくることなのかもしれません。誰もが縦・横・ななめのつながりの中で考えられる学べるように、・・・そんな気づきを少しでも具現化していきたいと考えています。温泉は出るまで掘る、ならば、包括的性教育が一般的となるまでへこたれない、でしょうか。



お忙しい中、ご案内いただいた、館様 (share 金沢)、木戸様 (輪島 KABULET)、ありがとうございます。



輪島の町を歩きながら、まだまだ残る傷跡に愕然としました。でも、売店にはフキノトウやセリ、ネコヤナギが売られていて、春の伊吹を感じました。4月からは、新しい事業も始まるかと・・・、NOTO,NOT ALONE 応援しています。

主催／北九州市

障害者の巣立ちを促す地域生活支援プロジェクトチーム

後援／北九州市教育委員会

福岡県弁護士会北九州市部会

協働／あかつき会家族会（旧称：北九州精神障がい者家族会連合会）

北九州市手をつなぐ育成会（親の会）

一般社団法人福岡県精神保健福祉士協会

北九州地区精神保健福祉士協会

一般社団法人 Q-ACT

NPO 法人 ネットワークぶらす北九州

公益社団法人北九州市障害者相談支援事業協会

障害者相談支援ネットワークふくおか

NPO 法人 nest